

中国ステルス機 J-20 は沖縄及び台湾東岸に対する脅威となるか

漢和防務評論 20170303 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

今回の珠海航空ショーでの J-20 に対する評価、印象を基にして、同機の台湾及び沖縄に対する脅威はどの程度か、漢和の記事を紹介します。

記事は、西側及びロシアの専門家の評価を基に、J-20 は第 5 世代戦闘機には該当しないと断じています。

中国空軍のトップも政府系メディアが宣伝するわりには J-20 に対し高評価のコメントを出していません。J-20 は政治的に選択された可能性があります。やはりエンジンがネックのようで、現在中国が開発中の WS-15 エンジンは、いつになったら J-20 に搭載できるのかわかりません。それまではロシア製 AL-31FM1 エンジンを使用することになるでしょう。

平可夫

今回 (2016 年 11 月) の珠海航空ショー終了後、西側及びロシアの航空評論家またその他の外国政府の調査員は、帰国のため香港で飛行機を乗り換えた。その際、本誌総編集は彼らと今回の珠海航空ショーについて討論した。一部の人は台北に行った。本誌はついでに台湾の同業者と同じ問題を討論した。討論内容は、中国の航空技術についてであった。当然我々は、討論に際し如何なる政治的偏見も持たず、またその必要もなかった。大多数の結論は、中国人自らが下した結論と完全に相反するものであった。価値観が全く異なっていたのである。J-20 がその典型である。今回 J-20 が初めて公開され、本誌は全行程約 80 秒間の相当詳細な映像を見た。以下は、ロシア、西側航空評論家及び政府研究員と本誌が受けた印象である：

” 遠くて、高いところを飛んだのは、何かを隠しているように見えた”

” 80 秒間の極めて機敏性を欠く飛行は、何を説明しようとしているのか？ 自信がないのか？ まもなく部隊装備が始まるのか？ 墜落を恐れているのか？”

” 唯一強い印象を受けたのは、約 80 度の迎え角での飛行を展示したことである：カナード翼、ベントラルフィン、F-22 や F-35 に比べてはるかに大きい翼面積、材料が同じだとしてもステルス能力は F-22 に比べかなり劣る”

” AL-31F エンジンを使用しているのだろうか？ 最近ロシアから輸入したのは M-1 型で、推力が 800KG 増加した。オーバーホール間隔も 750 時間に増加した。スラストベクターではなく、赤外線遮蔽装置はない”

” 超音速巡航能力はなく、スラストベクター技術もない” ことから、我々は第 5 世代戦闘機とは認められない。したがってロシアの T-50 との比較はできない” スプーイ航空機会社の高級主管は KDR にこのように述べた。

展示飛行時間の長短について、通常の下況下では、最新型戦闘機を初めて公開する場合、各国とも高難度の飛行は行っていない。F-22 をロンドンで初めて公

開したとき、1回上空通過しただけであった。インド空軍のLCA軽戦闘機を初めて公開したとき、1回上空を飛行しただけであった。F-22を初めてドバイで公開したとき、13分間飛行した。ロシアのT-50を初めて公開したとき、相当大胆な6Gを超える展示飛行を行った。

公開に関して言えば、J-20の展示飛行は隠しすぎた。80秒間では不十分である。国際的に見れば、情報調査員にとっても航空記者にとっても、驚くような内容はなかった。

今回の展示飛行についてKDRは次のように分析する：一、大量生産には程遠い。第一にエンジンが問題である。2017年になり輸入された最新のエンジンは、AL-31FM1エンジンで数は100基である。したがってKDRは中国戦略航空情報筋の説明に同意する：この大量のエンジンを何に使うか？それはJ-20用である。現在、中国上層部はこのように考えてはいないが、それならば、いわゆる国産の大推力エンジンWS-15は何時になったらJ-20に搭載できるのか？

今のところ、中国のネット上で、また官方メディアで誇張されたWS-15のニュースが流布されている。しかし航空機に搭載して試験しているのを誰も見ない。未だに飛行試験段階に入っていないのであれば、このエンジンは地上試験段階に留まっていることを意味する。

通常、新型エンジンの飛行試験は、7乃至8年の期間を要する。最初に輸送機に載せて試験し、その後、成熟した戦闘機に載せて試験する。最後にJ-20に搭載することになる。インドの高性能ファンエンジンは、ロシアで8年以上かけて試験を行ったが、未だに就役していない。

したがってWS-15が何時になったらJ-20に搭載できるか、読者が自ら推算して欲しい。

KDRの判断が正しければ、中国人は、WS-15が成熟する前に、J-20の次の試験飛行において、ロシアの最大推力（アフターバーナー）14500KGの117S型エンジンを使用してJ-20の超音速巡航能力の試験を行う可能性が極めて高い。そのほかに選択肢はあるのか？

次に、インドの航空評論家はJ-20の総設計師楊偉の動向に関心を持っていた。彼は、“総設計師”の職務を免ぜられた。なぜか？

本誌総編集は次のように回答した：中国文化では、第一線の主官から、一級上のレベルの副官に昇進するのを、“明昇暗降”（註：表面的には栄転でも、実際は左遷であること）という。多く的人是は嬉しく思わない。真に功績のあったものは、主官の職位のみを経て昇進して行く。

次に、J-20は、楊偉の手で第5世代戦闘機として最終設計段階まで完成したのであろうか？そうではない！これは、J-20がなお進化段階にあることを意味する。最終的に完成していないこの時期に普通は総設計師を交代させるだろうか？SU-27やT-50の開発過程ではこのようなことはなかった。

J-20の技術に関して、西側の航空評論家、技術専門家及び政府のアナリスト（政府の情報部門の航空アナリストの多くは、空軍パイロット、設計師の出身である）の結論は一致している：

1. 国際的に公認された第5世代戦闘機として必要な、超音速巡航能力が備わっていない。

2. エンジンの推力が不足。ステルス化のための赤外線遮蔽処理もなされていない。
3. 今回珠海で展示された機体は巨大で、長さは米軍の F-111 戦闘爆撃機並である。翼面積も大きく、多くの設計技術の寄せ集めのようである。他国の設計技術、例えば F-35 のインテーク設計を真剣に研究した形跡がない。ロシアの早期の 1.42 試験機のアエロダイナミックスは、なぜそのように設計されたのか？
4. ステルス弾倉はそれほど大きくはなく、詳細に測定した KD-20 巡航ミサイルを分析すると、結論は：J-20 は大型の巡航ミサイルは搭載できない、ことが分かった。それではなぜあのように胴体が長いのか？それは大型の機内燃料タンクを積むためである。そして航続距離を延ばし、エンジン推力の不足を補うためである。
5. この J-20 の現状を見れば、中距離、遠距離空中戦において、F-22 に勝てる能力はない。

本誌と交流する間に、このような結論を下した西側航空技術専門家は、70%以上に達した。慎重論の人、成り行きを見守る専門家は、今後 J-20 が改善され発展することを期待した。

これらの問題を中国人は認識しているのだろうか？或いは、成功したと思ひ込んだのではないのか？KDR は、中国が楊偉を左遷した動きからすでに問題が明らかになった、と考える。もし宣伝通りなら、なぜ空軍司令が、J-20 に満足の意を表明しないのだろうか？

KDR は：実際の作戦運用において、J-20 に付与する任務を見れば、J-20 の特性が明らかになる。高く評価する必要もなければ、J-20 の用途を低く評価する必要もない、と考える。空中戦において、F-22 に遭遇した場合、J-20 は相手になるか？上述の専門家たちの評価ですでに明白である。

しかし J-20 は、F-15 や F-16 といった日本や台湾の第 3 世代戦闘機に比べれば、よりステルス性が高い。J-20 の真のステルス能力はどのくらいか？各国の専門家の評価はかなり慎重である。その理由は、ステルス性は外形だけでなく、材料運用、レーダー運用も重要であり、どの複合材料をどの程度の比率で使ったかにもよるからである。この方面のデータは全くない。

第一、日本及び台湾と中国との間で軍事衝突が発生した場合、特に台湾東岸及び沖縄に対する空対地攻撃は、第二砲兵の弾道ミサイル、巡航ミサイル、H-6K 戦略爆撃機、及び中国海軍の潜水艦発射巡航ミサイルが受け持つので、沖縄及び台湾のレーダー及び飛行場は、J-20 が出撃する前にすでに破壊完了となる可能性が極めて高い。ステルス性のある J-20 は、大容量の機内燃料を持ち、滞空時間は台湾及び日本の第 3 世代戦闘機よりも長い。空中戦において、F-15 及び F-16 に対抗する J-20 は、ステルス機としての優位性を発揮できるか？もしそれができなければ、完全に失敗する。もし J-20 がステルス性を発揮できるのなら、台湾及び日本空軍は、沖縄及び台湾東岸に対する J-20 の脅威を真剣に考慮せざるを得ない。

第二、対地攻撃において、**J-20** のステルス性は **F-16** に比べて優勢か？もしそうでなければ、完全に設計の失敗である。もし **J-20** のステルス性が優勢であれば、台湾および日本空軍は真剣に対処しなければならない。特に **J-20** による花蓮及び台東飛行場に対する空襲能力である。もし地上及び空中レーダーが東海岸から **200KM** までに **J-20** を発見できなければ、**J-20** はスタンドオフミサイルで花蓮飛行場を攻撃する可能性がある。しかしこの攻撃は、**J-15** や **J-16** に攻撃させる方がはるかに危険である。台湾の地上レーダーは、**J-15** や **J-16** ならば、更に遠方でこれら航空機を発見できる。

J-20 が沖縄を攻撃する場合は、日本は速やかに米軍の支援を受けることができるであろう。**F-22** の沖縄滞留期間がますます長くなっている。しかし台湾は異なる。東海岸に対する攻撃に一旦 **J-20** が出撃した場合、台湾戦闘機は如何に対応するか？

KDR の結論：中国が **J-20** の使用を最初に考慮するのは、空中戦での有利性、対地攻撃におけるステルスの有利性から、台湾東岸に対する対地攻撃である可能性が極めて高い！と考える。ベトナムや南シナ海国家に対しては、中国は **J-20** を使う必要がない。

以上